

Preparations consist of a historical brief history of the Oblates in Japan. No English copies were made. For English History of OMI's in Japan, look under "ABOUT US" in the navigational bar.

来日後のオブレート会(主な出来事)

—主に 50 周年記念誌より—

1945 年	8 月 15 日	日本降伏
1946 年	12 月 25 日	アメリカ軍駐留本部は宣教師達の日本への出入国の権利を認めた
1948 年	1 月 25 日	オブレート会は日本に宣教師を派遣することを決定
	4 月 5 日	オブレート会は四国の 4 県のうちの高知県を委ねられる
	6 月 4 日	新しい宣教地区(日本)を第一アメリカ管区(後に東管区と改名)に任命
	11 月 1 日	最初の宣教師ロバート・ギル神父、レオナルド・ロビタイ神父、チャールズ・マクベネット神父がテキサス州ガルヴェストンから出航
	11 月 29 日	神戸港に着く
	12 月 3 日	大阪港から徳島市の南、小松島港へ(最初は高知県だけを依頼されたが、後に徳島県も受け持つことになった)
	12 月 5 日	高知へ
	12 月 8 日	高知を離れる
1949 年	1 月 14 日	第二団の宣教師達、ウィリアム・マクロクリン、ティモシ・マルビーとレオナルド・スカネル神父が到着
	1 月 17 日	日本語の勉強を始める(10 月 25 日まで)
	4 月	伊丹での宣教活動のために土地を購入
	6 月 26 日	伊丹のクワ入れの式
	11 月 29 日	ロビタイ神父は主任司祭として徳島へ、ギル、マクロクリン両神父はそれぞれ主任司祭と助任司祭として高知(新本町)へ、またその他の 3 人は伊丹の施設が完成するまで豊中にとどまった。
	12 月 4 日	高知県・徳島県の地区が正式に譲り渡された、池田(徳島県)は徳島小教区の宣教地となる
1950 年	1 月 24 日	伊丹の幼稚園と司祭館、祝別
1951 年		海の星(安芸)小教区設立
	夏	安芸の建物は居住できる状態になった
	10 月 15 日	安芸教会主任司祭就任
	11 月 8 日	安芸教会、海の星幼稚園落成式、祝別式
1952 年	3 月 31 日	安芸で教会法に基づく修練院設立に関する制令を公式発布
1953 年	春	福岡教区長は、オブレート会に那珂町(光ヶ丘)での小教区設立を依頼
	8 月 21 日	中島町司祭館完成、中島町小教区再開
	9 月 23 日	那珂町(光ヶ丘)の建物祝別
1955 年		古賀教会建てられる(福岡教区長深堀司教が福岡市東部に別の宣教活動拠点を開くよう求めた)
1958 年	12 月 20 日	中島町教会献堂式
1959 年		鳴門小教区設立
		鳴門の司祭館祝別
	12 月 8 日	日本人初のオブレート会修道士誕生
1961 年	1 月 17 日	オブレート会神学院完成(東京都練馬区)
1962 年	6 月 24 日	日本人初のオブレート会司祭誕生
		池田が小教区に昇格
		阿南小教区設立

1966年		伊丹教会献堂 阿南に司祭館と幼稚園が建てられる
1968年	4月	光ヶ丘教会新築、納骨堂完成 聖母学園開校
1970年		中村に司祭が住み始める
1972年	3月	オブレート会神学院売却
	4月	江ノ口教会は教区担当へ 修学院として東京都保谷市へ移転
1975年		ボランティアビューロー開設(中島町)
1977年		中村教会、司祭館建てられる
1978年		赤岡青波保育園閉園 鳴門教会移転
1980年		聖母学園閉校 ボランティアビューロー移転(江ノ口) 親業グループワーク開始
1983年		プロライフ運動開始
1985年	9月17日 夏	伊丹の久保さん宅が仮の修学院となる 第一回オブレート会サマーキャンプ開催
1986年	3月25日 5月5日	名古屋の聖心会修道院が仮の修学院となる こころのダイヤル開設
1987年	2月10日	オブレート会修学院が名古屋市天白区へ
1988年	春 9月4日	マミ活動再開(会員150名) 光ヶ丘教会、福岡教区へ返還
1989年	12月8日	青濤の家開所
1990年	5月	オブレート会韓国へ派遣
1993年	5月5日	阿南教会献堂式
1995年	12月3日	ウージェーン・ド・マズノ列聖
1998年		吉塚教会担当 膳棚教会担当
	11月23日	オブレート会来日50周年記念式典(中島町教会)
2003年		水巻教会担当
2005年	夏 11月26日	最後のオブレート会サマーキャンプ(2007年まで若者の集いとして続く) オブレート会修学院(名古屋)閉院
2006年		膳棚教会、名古屋教区へ返還 豊橋教会担当
2016年		オブレート会創立200周年
2017年	12月27日	オブレート会クリスマス会(青年と共に)、OMI召命年開始式
2018年		水巻教会、福岡教区へ返還
	10/7-8	オブレート会青年黙想会
	11月29日	オブレート会来日70周年
2019年	4月23日	青濤の家閉所

※他の担当・協力小教区…三田、加古川、住吉(神戸)、神戸中央、大阪梅田、三本松等

※所属管区の変遷未記入

これまでの歩み(主に 50 周年記念誌より)

50 周年ということ

* 50 周年記念誌の目的

- ・原点に戻り過去の精神や活気となったものをつかみ
- ・現代に同じような熱情を再び点火し
- ・将来への土台にする

* 50 周年の意味

- ・過去を振り返るといふことは、私たちの努力を祝うのではなく、歴史の中に神の御手を確かめること。歴史を形作っている数々の出来事の中に神の足跡を認めること。神は私たちと共におられたことを確信する。
- ・日本に来てそして去っていった多くのオブレート会士の中に、また、私たちを支援し続けてきた数えきれない程の人々(日本国内、海外を問わず)を通して、神は私たちと共にいたことも確信する。その方々が宣教のために捧げた犠牲はまさにオブレート会士の労苦と同じく意義深いものである。その方々の支援は神が私たちと一緒にいること、そしてこれからも共にいることを神が私たちに語っている。
- ・神の恵みの中で、私たちがいかに小さい者であるかを実感する。神の計画の中でこれからの歩みはいったい何かを探していく。

来日時のオブレート会

* 原点

- ・日本での宣教は、オブレート会にとって、神の御言葉をまだ聴いていない所に神の御言葉をもたらすために、新しい重大な仕事であり、創立者ウジェーン・ド・マズノの意向であることを確信している。
- ・この仕事はとても困難なものになるだろうし、他の宣教地から宣教師を削りたくないが、他の修道会が行かなければ、私たちこそ行かなければならない。オブレート会は「最も困難な宣教地の専門家」と教皇から名付けられたからである。
- ・日本での宣教活動によって、必要な新たな召命が生まれるだろう。そのために、あらゆる場所で、熱心に、神や保護者ウジェーン・ド・マズノの導きが祈られている。

* 戦後の日本

- ・戦後数年が過ぎても、敗戦の後遺症は深く、教会に食べ物や金銭の助けを求めてくる人が絶えなかった。
- ・敗戦による物心両面の荒廃と混乱、廃墟の中から立ち上がる気力を取り戻し始め、そのために必死だった。人々は、何かの拠り所を求めて教会の門をくぐってきた。
- ・オブレート会での日本での宣教は、日本の戦後史と共にあった。それは、日本の教会の戦後の歴史そのものでもある。

* 当時の日本でのキリスト教

- ・日本の降伏と共に宗教的にも政治的にも活動の混乱が起こった
- ・キリスト教派の区別なく、宣教師達はその機会が与えられれば、いつでも日本に来る用意が出来ていた。戦後最初に日本にやって来たのは、カトリックよりあらゆる種類のプロテスタントのグループだった。
- ・あたかも日本がまもなくキリスト教国になるかのようであった。

* オブレート会来日経緯

- ・総長レオ・デシャトレー神父が長い間、宣教師派遣の要請に抵抗してきたが、パウロ田口司教は、他のいかなる宣教会もこの貧しい地域での宣教は難しいとして、宣教活動にためらいを見せていることに抗議することによって、オブレート会総長の賛成を勝ち取った。田口司教のねばり強さがついに勝った。

* 担当する日本の場所

- ・四国地区はクリスチャンが少なく、カトリックの観点からすると、現在まで非常に貧弱な宣教下にあった。

- ・建設思案中の教会が7つ。うち4つは破壊され再建されるもの。その他3つは新しく建設されるもの。
- ・日本の他の地域と同じように、終戦以来多くの洗礼志願者達が、四国において真の信仰の勉強を心待ちにしている。
- ・最初は高知県を委ねられた。高知市と赤岡に教会がある。また高知市には、日本人の女子修道会の愛子会(現姉妹会)があり、修道女達はそこで慈善活動を行なっている。
- ・後に徳島県も依頼されることになる。
- ・徳島県、高知県いずれも戦時中爆撃によって、その90%が破壊されていた。教会の施設は全くの破壊状態か或いはそれに近い状態かのいずれかであった。

*担当する管区

- ・1948年6月4日、第一アメリカ管区(後に東管区と改名)に任命された。
- ・今後、神のご加護のもと、からし種のように成長するであろう営みに対して、資金を調達するという重大な使命がある。また、日本という宣教地に行くため、たくさん志願者達が必要となる。

来日後の活動

*小教区

- ・戦後の教会再建・創設、また新しい宣教(地)活動を行ってほしいとの要請があった。
- ・当時の司教様の要請により、上記の南四国(徳島・高知)以外に、福岡県と伊丹市に宣教拠点置くことになる。後に、名古屋に修学院があったことで、名古屋教区にも小教区を担当するようになる。
- ・小教区の多くは、付属の幼稚園を持ち、教会の建物の建設寄金が集まるまでは、幼稚園のホールで主日のミサを挙げる事も多かった。

*幼稚園

- ・幼稚園司牧を行う理由の一つ目は、戦争中、日本の殆どの教育施設は、壊されてしまい、建て直す必要があった。
- ・二つ目は、日本における教会が、社会に寄与する一つの方法が、小教区付属の幼稚園を持つことだった。この司牧をするに当たっての主な基準は、社会の中でその必要が感じられており、また、子供たちを通して日本の人々に接する事が出来、若い心の形成の一助となった。
- ・三つ目は、司祭が園長を兼ねていたので、修道会にとっての経済的助けになった。
- ・モンテッソーリ教育法を導入し、たいへんな成功をおさめた。
- ・幼稚園施設は補修していかなければならず、予想外の費用がかかるので、幼稚園組織網を学校法人にした。これによって、政府から助成金を得ることができるようになり、経済的に成り立っている。

*地域社会に向けての活動

- ・各学校での英語等の言語や宗教の授業担当、英語教育、若者への司牧(杉の木会[高校生対象]、若木会[中学生対象])、聖母学園での教育(語学[英語、フランス語、スペイン語、中国語]、美術[油絵、彫刻]、音楽、社交ダンス、心理学、料理)、地域での公教要理勉強会、絵画教室と公教要理、地域クリスマス会、スカウト活動、バザー、家庭集会、レジオマリエ、ロータリークラブ・ライオンズクラブへの参加、語学学校創設、基地チャップレン、結核療養所訪問、ハンセン氏病療養所司牧、マリッジエンカウンター、公的機関での通訳、労働司祭、エマウスの家(廃品回収を通してのホームレス救済)、ホームレス訪問、カイロプラクティック、社会野球チーム、いばらの冠(高松教区高校生会)、ボランティアビューロー、親行グループワーク、こころのダイヤル(電話相談)、青濤の家(女性避難所)、プロライフムーブメント、手話通訳、AA(アルコール依存症者自助グループ)支援、薬物依存症回復支援、刑務所教誨師、外国人(労働者)司牧、山岳(徒歩)宣教(外国人妻司牧)、子ども会参加、キリスト教のピラ配り、児童養護施設・教護院訪問、正義と平和活動、船員司牧、青少年司牧、人権を考える委員会、MAMI、カリタスジャパン、モンテッソーリ教育指導

* 召命

- ・西日本地区での侍者会(1960年代)、サマーキャンプ(1985-2005年)、オブレート会 Youth Gathering、オブレート会青年黙想会

* 韓国が新しい宣教地区として加わる(1990年5月12日)

綴(つづ)られていた声

* オブレート会士から

- ・私たちが信仰を持っていくより、キリストをその人たちの中に見つけるのを助けることが大切
- ・神様といればどこにいても寂しくない
- ・教理を表に出さずにカトリックの信仰を教えることのくふうを考えること。
- ・聖母マリアのご加護のもと、伝道師の支えによって大いに助けられた。
- ・宣教の意味や共同体の重要性を深く考えさせられ、識別の必要性を感じた。

* 周りの人々から

- ・オブレート会士は、惜しみなく人々を受け入れ、忍耐強く何も分からない私に生きるの意味、良い知らせ、福音を告げてくれた。
- ・人間、人生について話してくれる人(オブレート会士)がいるという友達に連れられて行った。
- ・当時カトリック信者はヤソと言われて反感と軽蔑の標的であった頃だが、信仰によるのか、彼(オブレート会士)の周囲の人をほとんどキリストに近づけている。そして信者が多く生まれた。
- ・彼(オブレート会士)が行う公教要理は、聞いていると心が落ち着いてきて、唯一幸福な時間になっていった。身体中が軽くなり、目の前がバラ色になるようだった。各々の存在理由を深め、確かめられる時間だった
- ・オブレート会のおかげで、的確な世界の教会の情報が入ってきた。さすがに全世界にネットワークを持つ修道会の良さを実感した。
- ・オブレート会は、いろいろな国から宣教に来ていて、国の違いを会の精神で一つになろうとしている姿に、違いを富として見ることができた。
- ・創立者の列聖の後、創立者の精神に生きようとの意気込みが感じられた。

これからの歩み(アベイヤ司教様のお話を踏まえて)

日本の今後の情勢

- ・少子高齢社会による人口減少、高齢者の増加
- ・経済活動の低下
- ・外国人の増加(あらゆる分野での人手不足)
- ・巨大災害の切迫
- ・情報通信や技術の更なる進展
- ・視点や価値観を変える必要性
- ・量よりも質の時代へ

修道会について

* カリスマを活かすには

* 共同生活のあり方

養成について

* 司牧者[我々]

* 信徒

日本での宣教について

* 小教区

- * 幼稚園
- * 外国人司牧
- * 地域社会に向けて
- * 召命

アベイヤ司教様のお話

日本での宣教について

* 宣教とは

- ・ 1 派遣されたところで福音を生きる
- ・ 2 人と関わる
- ・ 3 教会共同体と共に歩む
- ・ 4 新しい道を探し続ける

* シノドスが修道者、奉獻生活者に願うこと（新しい福音宣教での独特な貢献）

- ・ 1 神さまが大切な方であることを証ししてください。
 - ・ 自分の生活を通して
- ・ 2 つなぐ力を証ししてください。
 - ・ 共同生活を通して、そのあり方、内容
- ・ 3 福音宣教の最前線に出かけて行く準備をしておいてください。
 - 1 地理的な最前線(福音がまだ伝えられてないところ)
 - 2 文化的な最前線(新しい価値観、新しい課題のところ)
 - 3 社会的な最前線(貧しい人、疎外されている人、差別されている人、排除されている人のところ)

* 日本の教会の歩み

- ・ まだキリストの食卓に囲まれてない人をキリストの食卓に招くことと、日本の社会の福音化に私たちも貢献すること。
- ・ 信仰と生活の遊離、教会と社会の遊離を乗り越えていくことによって福音を伝えること。開かれた教会作り。
- ・ ①社会と共に歩む教会、②生活を通して育てられる信仰、③福音宣教する小教区(教会共同体)、この三本柱。

養成について

* 信仰を持っていて良かったと言える自覚のために

- ・ 1 振り返り
- ・ 2 分かち合い

* 自分の信仰を語れるように

- ・ 自分自身の霊性を深めること

* 福音宣教を中心に置く

- ・ その地域に福音を伝えていくためのくふう
- ・ ビジョンや方針を決め、福音を基準とした識別を行う

修道会について

* 小さくされた人々と共に

* 修道会のカリスマ

- ・ あらゆる活動に、修道会のカリスマを活かし、それを生きること